

《書評》

日中貿易逸史研究会編著 東方書店

『ドキュメント黎明期の日中貿易
1946年 - 1979年』

(中国研究所評議員) 横井 陽一

日中貿易の黎明期、1949年の新中国成立前後から、「改革開放」路線が開始される79年までの約30年の逸史（正史に書き漏らされた史実）について、商社マンであったOBの方々による体験ドキュメントが出版された。東工物産（現・東工コーセン）、和光交易、ニチメン、東京丸一商事、東京貿易などの日中貿易の第一線に携わった商社マンOBの5名の方が研究会をつくって数年にわたり資料を集め、体験を語り合い、関係者に会って何度も事情を聞き、或いは関係者に直接に執筆して頂いてまとめられただけに、臨場感があふれ、迫力がある。これまで書かれなかったが忘れてはならぬ先輩・仲間の苦勞された「逸話」「秘話」が満ちている。

「日中貿易の黎明の時代」は、中国国内の内戦・朝鮮戦争後の厳しい東西冷戦の下での苦難の時代であった。本書では、「困難を極めた3つのハザード」である「貿易制限下での苦闘」、「貿易中断と貿易再開」、「文化大革命」に関する「秘話」を選んでいく。

第一の「貿易制限下での苦闘」では、時期は1950年代、中国が朝鮮戦争に参戦するにおよび、米国が対中経済制裁で貿易制限を行った時である。中国産大正エビを船上で尾っぽを切って輸入するアイデアが思いつくという話(57年)とココム(先進国間の対共産圏輸出統制委員会)の規制管理とソフト技術に絡まる交渉・そして文革の混乱に苦闘した天津科学機器展商談(67年)である。

第二は、「貿易中断と貿易再開」の時期。貿易中断のキッカケになった長崎国旗事件(58年)について中国展主催者の証言、「総評」が仲介した甘栗と生漆の「配慮物資」貿易の誕生(59年)のいきさつ、「貿

易再開」は、石橋湛山・元首相への訪中要請の重要書類を腹巻に巻きつけて持ってきた話(59年)、周恩来総理が打ち出した「日中貿易三原則」(60年)が生まれてくる経緯の実話が書かれている。

第三は、商社マンの「文化大革命」である。この章は全体の3分の1を占め、本書の最も出色の箇所である。文化大革命中の1967年9月から68年5月にかけて6名の商社関係者が「スパイ容疑」で軟禁・投獄された。長い方は5年余におよび、国交回復後もなお半年に及んだことを本書で知って驚いた。本書はこれらの事実を当事者の証言（執筆寄稿と聞き取り）で、初めてまとまった形で世に明らかにした。その意味は重い。こうした「冤罪」は許されてはならない。事実を直視して、未来のために認識を共有しておきたい、との編者の意図は正しいことと考える。感動的なのは、独房で「死んでたまるか」と頑張り、釈放後は進んで日中間の貿易・友好交流活動を続けられた受難した方々の崇高な人生の歩み方である。多くの方が本書を通じて知ってほしい事実である。

日中関係は現在、黎明時代には想像も出来ないほど政治・経済・文化など多方面に発展・拡大しているが、その基礎となった苦難の時代に健闘し、問題を解決して前進させてきた記録・秘話・実話は、合併・貿易など種々の事業で奮闘・努力している方々への大きな励ましになるであろう。本書を読んでさらに思いを強くすることは、第一線の仕事を卒業した人々に是非、実体験・歴史を文章の形で残していただきたいことである。中国では孫平化、肖向前、林連徳の諸氏はいずれも回想の著作を残しており、見習うべきことではないだろうか、と思う。

幸いに本書の刊行が一つのキッカケになり、中国研究所内に「日中経済交流史研究会」が昨年発足したが、本書で取り扱った時代以降の交流記録・実話の収集・研究成果が期待される。

(2000年12月刊, 246頁, ¥2,200+税)